大阪教区 シノドス意見聴取のまとめ

2023 年に行われるバチカンでのシノドス（世界代表司教会議）の準備調査として、各教区に送られた意見聴取の質問票（4 月末最終締め切り）。大阪教区ではシノドス担当チームが回答を集計し、担当司祭であるヌノ・デ・リマ神父が 5 月 18 日の司祭評議会で報告、承認を得た。このまとめは司教協議会に送られ、全国 16 教区から提出された回答とともに、日本語のまま教皇庁シノドス事務局に提出される。また、7 月の臨時司教総会において日本の教会としての回答をまとめ、それを教皇庁に提出することになっている。以下、全文を掲載する。

A. はじめに

質問票への回答は約 330 件になりました。これは、小教区の評議会などからのもの、個人からのもの、修道会からのものを合計した数です。協力していただいた皆様に、ありがとうございましたとお礼をお伝えします。本来ならば分かち合いをしていただきたかったのですが、集いを開いてその内容を回答していただいた事例は少なかったようです。ただ、分かち合いをして報告していただいた小教区では実り多い機会と報告されています。

男性と女性の回答の比率は女性が約 7 割でした。年代別では 60〜70 代が多く、全体の 7 割くらいを占め、30〜40 代の人からの回答は少なかったです。それぞれの質問に対して回答をたくさん書かれた方もおられましたが、その反面、質問の内容を難しく感じられた方も少なからずおられました。

回答の傾向としては、似た内容や方向性の回答が多く見られ、いずれも教皇フランシスコが望んでおられる「ともに歩む教会」の再構築に向かうものであったと言えます。世界中の教区でシノドス（世界代表司教会議）の準備として現状を振り返り、その積み重ねで来年のバチカンでの会議につなげていくという大規模な取り組みは、今まで経験したことのない画期的なものでした。

シノドス事務局から提示された 10 項目の質問は、教会においてどのくらい「ともに歩む」ことができているのかを振り返り、今後さらに前に向かうための糸口を探るように構成されています。質問項目自体が教会本来のあり方を実現することを目指しています。

質問は大きく 3 つに分けられます。最初の 1 〜 4 項目は、ともに歩んできたことを問い直します。5 〜 7 項目は、どこまで教会が開かれた関わりができてきたのかを振り返り、8 〜10 項目は、教会がさらに本来の姿を実現することができるかを提起しています。現実を振り返り、広がりを求める視点を受け止め、教会が教会であるための欠かせない要素を探求して実現するように促しています。

では、質問項目ごとに報告された特徴的な内容を紹介します。

B.質問項目ごとの主な意見

番号後の文章は、シノドス担当チームのまとめです。その後の「●」は個別の意見から印象的なものを書き加えています。

１．ともに歩むことに関して

深い出会いの体験、分かち合いの大切さ、出会うことが可能な場の存在、開かれた関わりの存在などが多く指摘されていました。信徒養成での新しい視点、活動を共にすることでの支え合いなどの指摘もありました。

その一方で、主任司祭と信徒の断絶、司祭の権限としてすべてのことに決定権を行使する現実などを嘆く声もありました。

- 教会を去ってしまった人の痛みは私たちの痛み。
- 教会から離れている人の意見はここにはない。初めて来た人に対して淡泊ではないか。
- 小教区内の組織の再編が必要。昔ながらの壮年会、婦人会などを改変した小教区もある。
- コロナ禍の厳しい状況においては、病者などに電話をすること、手紙・教会だよりを郵送するなど、何らかの形で届けるとよいのではないか。

２．交わりの現実について

個人的な努力として、自分から声をかけるようにしている人たちがおられます。奉仕的な活動など、信徒同士のつながりがある人は仲間がいるのに対し、特に活動していない場合はつながりの機会が得にくいようです。まずは、挨拶し合う雰囲気が根付くように意識的に励むことが大切なようです。

- 元気で健康な人たちの声ばかりが目立っている。
- 10 の質問の点字訳は作成できなかった。外国語訳も日本に来られている各国語の人びとにお聞きしたかったのですが、一部の国にとどまった。外国人とのコミュニケーションが十分にとれない難しさを実感。
- 小教区の中に気楽に声をかけられる相手が 2～3 人いるとよい。典礼などの奉仕活動をきっかけにしたり、洗礼の代父母にも橋渡しをしてもらったりする。

３．発信することについて

地域社会の活動に参加している個人はかなりおられるようですが、小教区としてはあまり地域との関係づくりをしていないところが多そうです。地域とのかかわりの必要性に気づいていなかったようです。今後の課題です。

- 職場とは違う地域的なつながり。教会を地域に開放してはどうか。教会が地域の子どもたちに自習室を提供するなど。

- 子ども食堂の開設。フードロスを防ぎ、援助が必要な家庭に食料品を配布する奉仕を引き受ける。
- 地域で活動している人を支える仕組み。個人の活動を教会として支える。
- 小教区共同体の枠を外して考えることが必要。社会の状況、その必要性に合わせて、出来ることを考え積極的に市や町、地域住民のニーズに応える行動力を発揮できないか。

４．典礼の実際

一部の人たちがずっと担当している小教区が多いようです。役割が固定化しないように、任期制を採用する提案がありました。奉仕職が信徒の序列のようになっている弊害（へいがい）の指摘もあります。わかりやすい交代の仕組みがあるとよいのでしょう。

- 奉仕者が不満に思わないような配慮を講じた仕組み作り。クリスマスや聖なる三日間の典礼など、大きな意義を持つ典礼では経験豊かな人を優先的に奉仕者に充てて、普段から奉仕している人が経験する機会を持てない小教区がある。
- 任期制の導入。3 年やったら 3 年お休みなど、交代する仕組みが必要では。
- 典礼参加者が神様との出会いに招かれていくように、典礼奉仕者ができる貢献について探求することが大切では。
- 教皇様が来日の折に、司祭の説教について言及されたようですが、心に届く説教をしていただきたい。眠くならないものを。
- ミサの 15 分前に着席し、1 週間を振り返り、反省を次週につなげるように、また世界のニュースを思い起こしながら開祭までを過ごすことが大切。
- 大阪教区の新生計画で実施されていた「若い人のミサ・キャラバン（若い人が参加しやすいミサをあちこちで行う）」を実施してはどうか？

５．宣教活動について

信徒が入門講座を担当していることもあるようですが、信徒の役割がもっと盛んになっていくことを望む声があります。司祭・修道者にお任せしてきた伝統から、信徒も一緒になって入門講座を行っていくように変わっていくことが方向性でしょうし、信徒のチーム育成が大切でしょう。

- 「講座」という学習の場であるような名称を改めるべきでは。キリスト/聖書を学ぶ会とか聖書にふれる会など。
- 「教会」という名前も適切なのか？　神様の教えより生き方。信じる喜びを分かち合うことを大切にして、名前の言い換えを考えてはどうか。
- 勉強ではなく生活を振り返る分かち合いを中心にする。洗礼準備講座とは別に、キリスト教を学ぶという入り口になる集いを開いてはどうか。教会以外の場を使って聖書を伝える講座を開いてはどうか。
- 信徒を養成（学習も霊性も）しながら、信徒使徒職をさらに内実のあるものにしていく必要を感じる。
- 「出向いていく教会」のありかたを模索する。

６．対話する教会のあり方

地域との関係を大切にしてきた小教区もあれば、あまり意識してこなかった小教区もあるようです。

- 信者一人ひとりの実践している活動は教会から派遣されていると受け止める共通認識を持つことが大切ではないか。
- 各人には、その人でないとできないことがある（固有の召命）。職場におけるミッション、社会的霊性など。
- 社会活動は政治と結びついている。教皇の社会教説がそのことを訴えている。政治を忌避せずに、教皇の指摘をもっと真摯に受け止めるように。

７．他のキリスト教宗派とのつながり

朝祷会、エキュメニカルの集い、市民クリスマスなどの体験のすばらしさを語る人たちがいる一方で、エキュメニカル関連の活動を経験していない人たちも多いようです。ただ、個人的にプロテスタントの友人がいる人は多そうです。

- 主任司祭の否定的な姿勢のため、長年続けてきた市民クリスマスが終了してしまった。
- プロテスタントの人と一緒に祈る集いは大切。
- エキュメニカルについての理解を深める機会をつくること。

８．参加型、共同責任型の教会に向けて

役職が一部の人たちに偏っていることへの不満があちこちから表明されています。役割の交代の仕組みをどのように規約で定めるかが課題となっている小教区があります。また、小教区評議会の議題を事前に発表して広く皆さんの意見を受け付けるなど、風通しの良い小教区運営が望まれます。このシノドスのための準備のように、多くの人たちが意見や思いを表明し、分かち合う習慣がほしいです。

- 任期制を取り入れているところはある程度ある。問題は人材確保。信徒数の少ない教会は特に難しい。
- ブロックの中で違う小教区と行き来する。ミサ後に交流する場を持つ。
- 分かち合いの質。意見交換ではなく、ありのままの気持ちを分かち合うことが分かち合いであるという認識が大切。信徒同士の交わりは喜びであるという実感が教会を豊かにしていく。
- 信徒が前面に出なければ教会は発展しない。

９．霊的な識別について

聖霊の導きを共同体として選び取っていくことが大切でしょう。シノドスのための準備で「セブンステップ（分かち合いのプログラム）」を使ったように、みことばに触れて、祈りをともにささげて、信仰

的なセンスで共同で決定していく仕組みが求められています。簡単ではありませんが、このポイントが入ってくると、雰囲気が変わっていくでしょう。

- 聖霊の導きをすごく特別なこととしてとらえられてしまっているように感じる。どれだけ普段のレベルに根付かせるか。
- 「識別する教会になるように」との教区からの要望に、識別の意味を「根回し」と理解している人もいるらしい。「識別とは何か」を司祭も信徒も共に学ぶ必要を感じる。
- 司祭・修道者・信徒が同じテーブルに着き意見を交わすことの重要性は、福音宣教推進全国会議（以下NICE（ナイス）、1987・93 年開催）が目指した福音宣教の優先課題「開かれた教会」のことである。声の大きい人に合わせて忖度（そんたく）するようなことがないように、一人ひとりのありのままの意見、考えを引き出せるような環境づくりが必要。

10. シノドス的な成長に向けて

NICE や大阪教区の新生計画では、多くの養成コースや研修会がありましたが、そこで重視されていた「分かち合い」がこの頃少ないようだとの指摘があり、ともに歩む実感として、分かち合う機会を大切にしていくことが提案されています。今回のシノドスのための準備をきっかけにして、「シノドス運動」を活発化することが望まれています。教区としての組織的推進が必要かもしれません。

「信仰と生活の遊離」が今もってあり、「シノドス的な成長」・「共に歩むこと」と言っても、どのように歩めばいいのかわからないとの質問が寄せられていました。

- 「セブンステップ」の有効性を多くの人たちに体験してもらう。改めて、そのための体験的な研修会を実施する。
- 「識別」「シノダリティ」とは、「イエスならどうするか」を判断することだとわかってほしい。

その他

- 信徒・司祭の養成の必要性を感じる。教皇文書などをよりわかりやすくかみ砕いて丁寧に説明する機関や機会があればいい。
- お互いに共通理解し合い、歩み寄る場が大切だが、難しい。地道に分かち合いを続けていくことが大切。
- 司祭の態度によって、その小教区の雰囲気が変わる。信仰は「教義によってではなく、神父との出会いによって福音が広がる」と言われている。日本語が拙（つたな）くても、人となりによって伝わるものはあると思う。
- 外国人、いろいろな障がいを抱える人たち、困難さを抱えている人たちが互いに出会い、祈り、歩めるように工夫すること。何が必要で何を希望しているか話し合う機会を持つことだと思う。

大阪教区では阪神淡路大震災の後、『新生の明日を求めて（1998 年）』という冊子を作った。こうした努力を続けて欲しい。

C. 今後に向けて

「ともに歩む」ことができているのかを振り返るせっかくの機会でしたが、コロナ禍もあって分かち合いの場を十分に作り切れなかったことを考えると、今後の方向として、小教区、地区、教区のそれぞれの場で、これまで取り組んでいたシノドスに向けた準備の作業（分かち合い、霊的識別の探求）を「シノドス運動」として継続し、具体的な刷新を実現する方向を整えていくことが望まれます。

今回のシノドスのための準備をさらに充実させて発展させるような、教区からの働きかけが必要だと思います。地区や小教区も積極的に創意工夫していくことが期待されます。

来年のシノドスの会議の後で、その 1 年後くらいに教皇が使徒的勧告を出されます。その文書を熟読する機会をつくるとともにその使徒的勧告をテーマにした分かち合いを進め、シノドスである教会実現に向けてともに歩みたいと思います。

シノドス担当チーム

【2022 年 5 月 18 日（水）司祭評議会承認】